

白氏文集 四十八 適意

加藤淳平

白樂天四十歳の折の作なり。七十五歳まで生きてる人なれば、ほぼ人生半ばなりき。前述せる如く、漢土の官吏、親死すれば三年の喪に服す。樂天も母死して、長安の西の渭村に退隱す。樂天「平生の志」に歸するを得て、「飢寒の愁ひ」と「尸素の羞らひ」を離れ（「尸素の羞らひ」とは公務に従事する者の厳しく拳々服膺すべき言葉ならずや）、「自由」・「適意」の境涯を滿喫す。漢土の文人が理想、茲にあるべし。

適意	意に適す
十年爲旅客	十年 旅客爲るに
常有飢寒愁	常に 飢寒の愁ひ有り
三年作諫官	三年 諫官と作りて
復多尸素羞	復た 尸素の羞らひ多し
有酒不暇飲	酒有れど 飲むに暇あらず
有山不得遊	山有れど 遊ぶを得ず
豈無平生志	豈 平生の志無からんや
拘牽不自由	拘牽せられて 自由ならざりき
一朝歸渭上	一朝 渭上に歸れば
泛如不繫舟	泛ぶこと 繫がざる舟の如し
置心世事外	心を 世事の外に置き
無喜亦無憂	喜び無く 亦憂ひ無し
終日一蔬食	終日 一蔬食
終年一布裘	終年 一布裘
寒來彌懶放	寒來たれば 彌いよ懶放にして
數日一梳頭	數日に 一たび頭を梳つる
朝睡足始起	朝は 睡り足りて 始めて起き
夜酌醉即休	夜は 酌みて酔ひ 即ち休む
人心不過適	人心は 適なるに過ぎず
適外復何求	適なる外に 復何をか求めん

（大意）若い頃の十年、住居定まらず旅客の境涯にあつた間は、いつも飢餓と寒さの悩みがあつた。その後官途に就き、三年の間、皇帝に意見を申し上げる官務を勤めて居た時は、資格もないのに身に餘る待遇を受けて居ることへの羞らひが多かつた。酒があつても、飲む暇は無く、山が近くにあつても、行つて遊ぶことはできなかつた。悠々と清遊したいとの平生の志が無かつたのだらうか。さうでは無いのだが、束縛されて自由になることができなかったのだ。しかし母の喪のため渭水のほとりの故郷渭村に歸つて来て、ともづなを離れて浮ぶ舟のやうに自由になつた。世事に心を煩はされることがないので、喜びも無いけれども憂ひも無い。一日中野菜だけの粗末な食事をし、一年中布や獣皮の粗末な

衣服を身にまどふ。寒い季節が来ればいよいよなまくらになって、数日に一度しか頭に櫛を入れない。朝は眠りたいだけ眠って始めて起き、夜は酒を酌んで酔ふと、そのまま休む。人の心は思ふがままにするのがよいのだ。思ふがままにする外に何を求めるのか。

(令和元年十二月二日受附)